

佐井寺 西 寶 寺

二十回生 浅野倉平

西寶寺は浄土真宗本願寺派のお寺で、「山田寺」佐井寺「注一」の東、約七十メートル程の所にある。建立は一六二〇年代とされているが、それまでは、長年にわたり、この場所は門徒衆の念仏道場として使われていた。

しかし、いつの頃から念仏道場が開かれたのかは定かでない。浄土真宗の宗祖である親鸞上人（一一七三年～一二六二年）は布教に当たり、寺院は一寺も造らなかったが、念仏道場は積極的に造り、活用したと伝えられているので、佐井寺の念仏道場も、かなり古い時代に開かれたものではないかと推察される。

西寶寺の本堂には、中央に阿弥陀如来がまつられおり、

左側に連如上人（一四一五年～一四九九年）が、右側には親鸞上人が祀られている。

親鸞上人は先にも述べた如く、浄土真宗の宗祖であるが、連如上人は浄土真宗の中興の祖とされている。当時、本願寺は青蓮院の末寺であったものを再興し、本願寺教団の礎を築いた。その手法は、消息（手紙）のかたちで判り易く説いた「御文」「御文書」を中心に布教をおこなったとされている。他方、私生活においては、五人の妻を娶り、十三男・十四女をもうけている。

現在の西寶寺のご住職は十二代目であるが、そのご住職に、お寺のエピソードを伺った所、「なにも無いのが、この寺のエピソードである」との事だった。

しかし、一六二〇年代に名門「佐井寺」の目と鼻の先に、西寶寺を建立したのは、門徒衆の団結力の凄さを感じる。

当時の「佐井寺」は、天正年中（一五七三年～一五九二年）に兵火に罹り、七伽藍・六十余坊舎を失った後の最悪の状況化に在ったとは謂え、朝廷（嵯峨天皇）より綿百屯を施入しており、又、公家恒例御読経二十一カ寺に列せられていたなど、名門中の名門である。その「山田寺」の目と鼻の先に、新しくお寺を建立する門徒のパワーには凄さを感じる。

「佐井寺風土記」には西寶寺は、格別には取り上げられてはおらず。七ページの地図上に名前が記載されているのみであるが、「佐井寺風土記」の著者の藤井久義氏には、何のエピソードもない西寶寺は取り上げにくかったのかな、などと推察している。

尚、現在の西芳寺の本堂は、昭和三十六年（一九六一）に再建されたものである。

完



「注一」「山田寺」は碓井山佐井寺の別名であるが、最近では「山田寺」と呼ぶより「佐井寺」と呼ばれる方が多いように思われる。私の少年期の頃は「山田寺」の事を、専ら、親しみをこめて「さんでんさん」「さんでんさん」と呼んでいた。此の呼称の方が、地名の「佐井寺」とお寺の「佐井寺」の区別が付きやすく、使い勝手が良い様に思う。「山田寺」のネーミングの経緯に付いては、天平七年（七三五）、僧行基が佐井寺の裏山の瑞光に氣付き、掘出した観音像（現在の本尊）の事を。時の帝、聖武天皇に奏上した所、帝は山田大臣に七堂伽藍と六十余宿坊の建設をフロデユスすることを命じた事から、山田大臣に因み「山田寺」と呼ばれる様になったようだ。